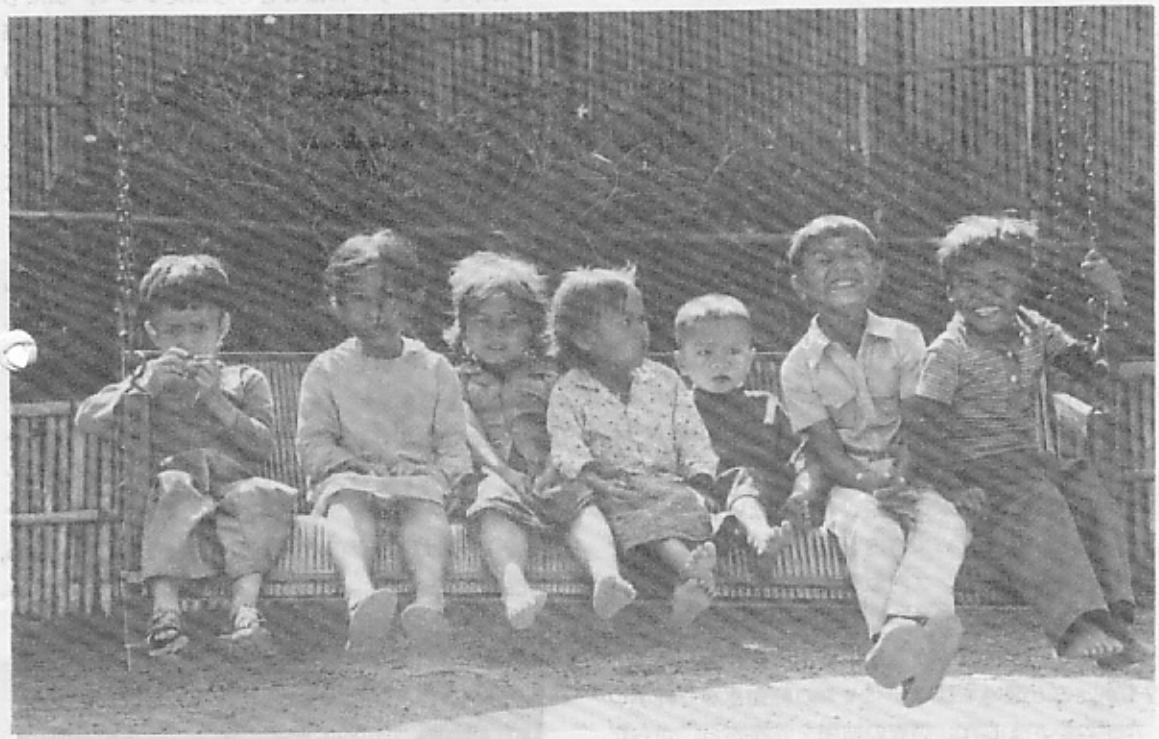
幼い難民を考える会
幼い難民に未来を……CYRニュース　第8号
〒150 東京都渋谷区広尾4-3-1　03-499-1226　普通預金口座：第一勧銀広尾057-1280817　郵便振替口座：東京1－36227



3年前，国境で餓死をまぬがれた子ら。いまは保育センターの主役。

「希望の家」の新しい仲間たち

カンボジア難民キャンプにある保育園が開設されてから，やがて2年になります。今年2月から800人の子どもにまじって，聴覚障害などのある体の不自由な子どもたち6人が新に加わりました。いままで自分の家から離れたことのなかったこの子たちは，ほかの子どもたちとなじめず，部屋の隅にうずくまって動こうとしなかったり，障害児の相手に慣れないクメールの先生たちも，心細くてならない様子でした。この子どもたちも，いまでは仔犬のようにころげまわったり，絵カードを手に絵の名を呼びあったり，じつに生き生きと楽しげで見違えるほどです。新米の保母さんたちは，くったくない子どもたちの様子に励まされて，日ごとに自信をつけてゆくのがわかります。

難民キャンプで私たちが障害児に目を向けるきっかけは，早くからありました。障害のある子どもは学校では他の子どもの妨げになるというのがキャンプ内の学校関係者の意見だったのです。小学校から閉め出された子どもたちは，いつの頃からか「希望の家」に遊びにくるようになっていました。母親たちの授産施設をそなえた保育センターの運営が，すっかり軌道にのった昨年12月，私たちは障害児を保育センターに迎える準備を始めました。大阪の養護施設に働き，長年の経験をもつ立石三月子さん，それに現在，川崎で養護施設職員をするカンボジア人ペン・セタリンさんを現地に迎え，障害児指導の具体的な内容をまとめました。ボランティアのひとり長峰光恵さんは，保母さんの目で，障害児を迎えた保育センターの様子を，つぎのように報告しています。

保育室に障害児を迎えて

長峰光恵

障害をもつ子どもたちが保育園で友だちをつくり，一緒に遊べるよう指導する先生の養成が始まったのは，1981年12月末のことでした。大勢の希望者の中から選ばれたのは，18歳から46歳までの10名の難民で，カンボジアでは「僧侶でした」「小学校の教師をしていました」と名のるキャンプの住民たちです。

障害児指導のための養成は，とりあえず6週間ときまりました。午前中は保育実習を通してたくさんの子どもに接し，保育が終ると子どもの活動や教材について，すでに経験を積んだカンボジアの先生が，具体的な説明を受けもちました。教材ひとつひとつを示しながら，それをどんな時に子どもが使うのか，使い終ったあとはどうするのかなど，とても興味深い内容です。カンボジア語がわからない私たちでさえ，思わず足をとめて室内を覗くことがしばしばでした。午後はキャンプ内の障害児の実態を調べる時間にあてました。

気温が40度に近くなる昼下がり，それらしい子どもがいると聞いてはニッパヤシの軒先きを一軒ずつたずね歩きました。調査の結果を見ながら，からだが不自由な人，ことに障害のある子どもを理解するうえで大切だと思われること，たとえば手助けされる子どもの心の状態，またどんな時どんな形で手助けをしたらよいかなどを，ペン・セタリンさん，立石三月子さんが具体例をあげて話していきました。さらに日本の保育園の例で，障害をもつ子どもと健康な子どもがどのような過程をへて友だちになっていくのかも話しました。この時，私たちのことばはもちろん日本語です。日本語から英語へ，または日本語からカンボジア語へと通訳された話の内容がどんなふうに先生たちに伝わっていくのか，とても不安になりました。しかし，みんなの真剣なまなざしに励まされて，話し合いは回を重ねていきました。

そして6週間の養成を終えてしばらくすると，「希望の家」の保育園に新しく6名の子どもを迎えました。耳が聞こえず口がきけないという子どもばかりです。はじめのうち，子どもたちは保育室の片隅に座ったままで動こうとしなかったり，先生にしがみつき涙をポロポロとこぼしていました。なじみのない日本人スタッフにはことさら怯えるので，私たちは保育室の外に立って竹の小さなすき間からその様子を見ていました。「あせらないでいこう。」あの頃毎日くり返していたことばです。

この6人の中には，わずかしか歩けない状態の子どもが2人いました。保育センターからも遠い所に住んでいたので，子どもたちの安全を考えてマイクロバスで送り迎えをしてはという意見もでました。しかし，先生と子どもの心のつながりが大切なのではということから自転車をすすめました。今でも忘れられない事があります。子どもを送ってもどってきた先生が息をはずませていいました。―「家に帰る途中，あの子が"サンダル……"といったんです。確かにそういったんです。見るとサンダルが片方脱げていました。本当にあの子が口をきいたんです。」私は思わず心の中で叫びました。「やったね，先生！」と。

9カ月のボランティアの仕事を終え，今年3月帰国した長峰光恵さん（24歳）。写真左

ほんものの幸せ

山極小枝子

うめだ「子供の家」の保母，山極小枝子さんは，1979年12月，タイの難民キャンプで，いいぎりさんと一緒にボランティアとして働きました。翌年2月，東京に誕生した「幼い難民を考える会」は，このときの体験をもとに，難民の自立をめざす救援活動のあり方を具体化させ，今日の規模に発展させました。

毎日の仕事が，子どもたちと生活することにある私にとって，CYRの活動の中でもとりわけ関心があったのは，日本にいては想像もつかない難民キャンプという環境の中で，子どもたちをどう援助してゆくかの点でした。

去年のことになりますが，キャンプの子どもたちのために，私は友人に相談して教材用の正方形の紙を送ったことがあります。かなりの量になりましたが，数千人もいる幼児の数を思えば充分ではありません。たまたまいいぎりさんが帰国された時，色とりどりのその紙が役に立ったか，また今後も必要かどうかをたずねました。いいぎりさんは，いま自分たちができることはいくらでもあるけれど，長い眼で見て，援助がキャンプの子どもたちに，耐える力判断する力をつけることにつながらないのでは意味がないように思うと話されたのを思い出します。援助する側の自己満足であってはならないし，また受け手が，援助はあってあたり前，それがなければなにも始まらないと思いこむような状況をつくるべきではないという話でした。紙が乏しければ古新聞を切りそろえても使えるし，実際それで用は足りるのだという話に，私は考えさせられました。

子どもはひとときもじっとせずに体を動かし，感覚器官をフルに使って学習する好奇心のかたまりのようなものです。子どもの好奇心を満たすものが必要なのは，キャンプの子どもにとっても同じはずです。2年前，初めて難民キャンプへ行ったとき，外国人とみると物乞いをする子どもの姿が見られました。それがいまでは，キャンプに暮らす人たちが子どもの成長を楽しみに，協力し合って教材をつくり，布地を織っていると聞きます。働くおとなの姿を見ながら育つ子どもたちは幸せです。そして「お気に入りの人形を片時も離そうとしないこの子どもたちの幸せを，私はほんものだと思っている」（「朝日ジャーナル」'82 1月29日号）といえるまでに育った子どもたちへの，現地での目に見えない努力に頭のさがる思いがしています。

先日，テレビの影響をかなり受けている子どものお母さんと話をする機会をもちました。親子3人の家庭にテレビが2台あり，1台は子ども専用だと知りました。この話を聞いただけで私は，家に帰ってから寝るまでの子どもの生活がわかったように思いました。物が氾濫する日本で，物に頼りすぎる私たちの生活は，難民キャンプでの実践からもっと多くを学ばねばなりません。

家族パワーにバザー盛り上がる

さる4月18日，鮮やかな青葉のもとで第5回CYRバザーが開かれました。会場の聖心インターナショナル・スクール駐車場には，時間前から大勢の人が並び，開場をせきたてられた係員は大あわて。いつものように会員から寄せられた品は，衣料品，雑貨，家具，古本，靴，レコード，それに難民キャンプで織られた木綿，絹地など。ところ狭しと売場に並べられた品も，午後2時にはあらかた売りつくしました。当初は主婦パワーが主力だったバザーが，いまでは家族単位の催しものとなり，ことに小中学生，大学生が友だちと一緒に売場に立つ姿が目立ちました。

今回はパネル写真も会場に展示し，難民キャンプの様子をPRしましたが，ヤキ鳥やハンバーガーの匂いには勝てず，人影はまばらでした。

朝10時から始まったバザー，この日の収益はあわせて712,960円。次回バザーは10月末日を予定しています。次回用のご寄付の品は，事務所が手狭なため9月末よりお受けすることになっています。

「育て難民キャンプの子ら」

―― 写真展各地で反響呼ぶ ――

2月下旬，名古屋をふりだしに全国6都市で開かれた第2回写真展「育て難民キャンプの子ら」は，5月末岩手県宮古市を最後に幕を閉じました。長いキャンプ生活にもめげず，育ってゆく子らの目の輝きや，先の見えない生活と不穏な国境情勢への不安を包んだ母たちの厳しい表情などを，みごとにとらえた写真展でした。

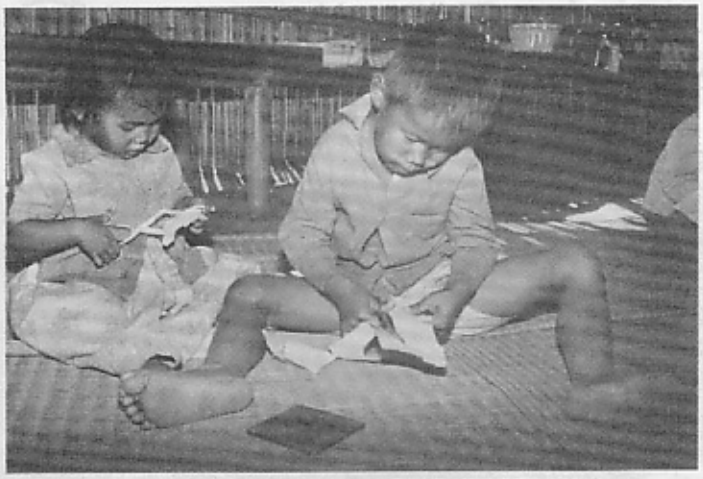
「育て難民キャンプの子ら」と題した難民キャンプでの2年間の記録は，「幼い難民を考える会」が，難民問題をどうとらえ，実践してきたかを多くの人に伝えるのがねらいでした。

各地での反響はさまざまでした。新聞は「静かに平和を訴えた写真展」（京都新聞）「戦争の影がしのびよる生活を問う」（朝日新聞）と報道しました。戦争体験をもつ60代の人が，食い入るようにパネルを見る姿は全国共通でした。また，他人の痛みに敏感な子どもたちのするどい反応にも，関係者は力づけられました。「自分の国や愛する家族を失なった人の悲しみが，刺すように伝わってくる。」「生きるために欠かせない水と，そして食べものを，むだにしてきた自分が恥しい。」「だんだん改善されてきた難民キャンプの生活を見ていると，自分たちにできることがあるとわかって，うれしい。」（聖心インターナショナル　スクール，中3女子」

写真をとおして若い人たちの理解を深めたいと，会ではパネル写真の利用を呼びかけています。職場，学校などでぜひご利用ください。お問い合わせは事務局まで。

身長，体重，腕の太さの変化は子どもの成長の異常，正常を知る手がかり。手製の身長計は父兄の力作。

近くで実弾演習の音がとどろく。キャンプで生まれた子を膝に入れ，母は糸繰りの手を休めようとしない。



ハサミを初めてにぎった子ら。家にはもちろんない道具である。

〈投稿〉

カンボジアの
幼きものらのすがしき目
写真に見つつやすらぐしばし

秋田　山本ちえ

給水車が水を定期的に運んでくるので，水浴びもできるようになった。幼い子も水が貴重だということを知っている。

姉が運び，母が運ぶ水。飲料に調理に洗濯に，そして体を洗うときは，器にすくって頭からかぶる。

有刺鉄線から出られない生活はもう3年を数える。早くカンボジアへ帰りたいが，帰るのはこわいと，だれもがいう。

1人が1人の新会員を

第2回総会で活発な討議

「幼い難民を考える会」の第2回定期総会が，5月2日東京，広尾の宮代会館で開かれました。議題は1981年度の活動報告，会計報告，役員改選および今後の活動計画で，当日の参加者は委任状提出者を含め171名でした。

この総会ではそれぞれ報告事項の承認のあと，新理事8名と会計監事1名が選ばれました。今回初めて理事に選ばれたのは深水正勝さん（前「会」会計監事）と見坊和雄さん（前全国社会福祉協議会事務局長）。会計監事には，これも新しく鈴木雅博さん（税理士）が選ばれました。

総会の議事は，深水さんの司会ですすめられ，日本国内での活動を関口さん（事務局），タイ国内での活動をいいぎりさんが，それぞれ行いました。また現地状況を伝えるため，8ミリの映写がありました。会計報告者は佐藤和子さん（事務局）。

ついで，新年度の方針の討議にはいると，前駐カンボジア大使の栗野鳳さんが，会のUNHCR駐日事務所との連絡，協力を助言したのを皮切りに，「ボランティア募集にあたっては，仕事の具体的な内容の説明を」「保育，福祉の専門家に広く呼びかけを」「1人の会員が最低1人の新会員を」「ボランティアたちの生活条件を安定させるよう充分な配慮を」など，活発な意見が出席者から出ました。

新年度から予算の立て方で大きく変ったのは，国連などの国際団体から受ける補助事業の収支を，「会」の会計から切り離した点です。

その他，川村理事から，「会員の資格」など，現在の規約について再検討すべき点の提案があり，次回総会までに，理事会で相談することになりました。総会で選ばれた新役員はつぎのとおり。

〔理事〕◇いいぎり　ゆき（団体役員）◇川村フク子（弁護士）◇見坊和雄（団体役員）◇佐藤恒夫（会社員）◇広戸直江（大学講師）◇深水正勝（神父）◇箭内（やない）祥周（会社役員）◇山極小枝子（保母）＝50音順＝〔会計監事〕鈴木雅博（税理士）

代表にいいぎりさん再選

第8回理事会で

第8回理事会（6月13日）は，さきの総会で選出された8名の新理事の中から互選により，つぎの新役員を選びました。いいぎり　ゆき（代表理事），川村フク子，深水正勝（事務局担当理事）。

注目浴びた地道な活動

テレビの2番組が紹介

さる5月，日本テレビ「世界にかける橋」（9日）「心のともしび」（22日）の両番組は，難民問題が激化した頃から現在までの「幼い難民を考える会」の仕事をとりあげ，難民への援助がまだまだ必要であることを訴えました。「心のともしび」地方放送日，RNB・7／3，NKT・7／11，RKC・6／26，29，ITC・7／10，UMK・7／17，KRY・6／27，CTV・7／3，SBC・6／28。

事務局から

✡　第6号で3月移転予定とお知らせした事務所は，聖心会本部のご配慮により，来年3月まで現在の場所を使えることになりました。

✡　東京都より昭和57年度寄付，募集許可がおりました。目標額は850万円。現在（6／12）までの寄付総額は，1,635,759円です。活動の火を絶やさないよう，ご協力ください。

✡　会費未納者が多く，通信事務費が不足しています。第2回総会の決議により，6カ月間会費滞納が続くと会員資格がなくなることになりました。6月現在，支援会員は290名。新会員，賛助会員を増やせるようおしりあいをご紹介ください。

✡　6月16日，事務局の関口晴美さんが3カ月の予定でタイへ。平山嘉代子さんは6月25日帰国。

第8号の係　川畑，関口，森定，長峰，いいぎり
写真　野中章弘